

2025 年 11 月 30 日待降節第一主日 「目を覚ましていなさい」 北川逸英師
マタイ 24 章 36 節～44 節

今日は、待降節の第一主日です。教会のカレンダーでは、今日が「一年のはじまり」のような日です。でも、今日読まれた聖書の言葉は、クリスマスのやさしい場面ではなくて、「終わりの時」「裁き」「ノアの洪水」といった、恐ろしく感じるような場面でした。どうして一年のスタートの日に、わざわざこんな話を聞くのでしょう。

それは、神さまが私たちの人生の「ゴール」を先に見せてくださっているからです。聖書が言う「人の子が来る」とは、最後にイエスさまがもう一度来て下さることを指します。その時は「救いの完成の時」ですが、同時に「裁きの時」でもある、と聖書は言います。でもここで言う「裁き」は、「悪い人は全部こわされるぞ」という怖い話だけではありません。聖書には「愛は決して滅びない」と書いてあります。だから、神さまの裁きとは、「愛そのものは残り続けて、愛に反するもの、愛に反する部分は燃やされて、なくされていく」ということです。「愛に反する人が消される」というよりも、「わたしたち一人ひとりの中にある、愛のない部分・冷たい部分・自己中心な部分が、キリストの愛の中で焼き尽くされていく」と考えることができます。そうやって、わたしたちが少しずつ、キリストのように変えられていく、その完成が「終わりの日」なのです。

イエスさまは、ノアの物語を使ってこんなたとえを話します。ノアの時代の人たちは、食べたり飲んだり、結婚したり、ふつうの生活をしていました。それ自体は悪いことではありません。でも問題は、洪水が来るまで「何も気づかなかった」というところです。神さまがノアを通して語っておられることに気づこうとしない。自分の生活のことで頭がいっぱいで、神さまの声にも、周りの危険にも、まわりの人の苦しみにも目を向けない。その「気づかなさ」が、一番こわいのだ、とイエスさまは言っておられます。

今の世界も、ある意味で同じです。戦争のニュース、いじめや差別、地球環境の問題、心の病や孤独で苦しんでいる人たち…。そういう現実、スマホのニュースや SNS にも、学校や社会そして家庭の中にも、たくさんあります。でも、なんとなく見ているだけで、「自分には関係ない」と思って流してしまうことが多いのではないのでしょうか。イエスさまは「目を覚ましていなさい」と言って、私たちをおどかさそうとしているのではなく、「本当に大切なことに気づいてほしい」と願っておられるのです。

では、「目を覚ましている」とは、どういうことでしょうか。ただビクビクとしながら「いつ終わりが来るんだろう」と心配し続けることではありませんし、「この世のことなんてどうでもいい。終わりの日のことだけを考えればいい」ということでもありません。

マタイによる福音書は、このあと、いくつものたとえ話を続けて語りながら、「目を覚ましている」とはどう生きることなのかを教えてください。そして、最後にこう言います。「お腹のすいている人に食べ物をあげた。のどの渇いている人に飲み物をあげた。旅人やひとりぼっちの人を迎え入れ

た。病気の人や牢屋にいる人を訪ねた。そういうふうに、『一番小さく見える人』にしたことは、実はわたし(イエス)にしてくれたことなのだ」と。

ここからわかるのは、神さまの前で「目を覚ましている」というのは、「苦しんでいる人、助けを必要としている人に気づき、その人に愛をもって近づく」のだということです。目を覚ましていれば、眠っている仲間を、一番適切な時を見計らって、やさしく起こすことが出来ます。その役目を、神さまから与えられています。だから苦しんでいる人たちを助けます。

けれど目を覚ましている人は、自分だけ起きていて、他の人を見下している人ではありません。まわりの仲間や友だちが、もう疲れ切って眠りこんでしまっているとき、心が折れてしまっているとき、傷つきすぎて「もうどうでもいい」とあきらめているときには、そのそばに静かに立ちます。

そして「もう起きなさい！」と怒鳴るのではなく、その人にとって一番いいタイミングを待って、そっとゆさぶり、「一緒に起きよう」とやさしく声をかけます。目覚めた人は眠り込んでいる人のペースを大切にしながら、側で見守って必要な時「あなたは一人じゃないよ」と伝えられる人です。

教会は、本当はそういう人たちの集まりでありたいと思います。イエスさまに先に起こされた人たちが、今度は、ほかの人のそばに立ち、一緒に目を覚ましていこうとする。その輪が少しずつ広がっていく。それがこの待降節を生きる教会の姿です。

イエスさまご自身は、ゲツセマネの園で弟子たちが眠り込んでしまったときも、彼らを見捨てませんでした。弟子たちは何度も失敗したけれど、十字架と復活のあと、イエスさまは何度も何度も彼らに会いに来て、やさしく起こし続けてくださいました。そのイエスさまが、今もわたしたち一人ひとりのそばに来て、「起きなさい。もう一度一緒に歩こう」と声をかけてくださっています。

この待降節、わたしたちも、世界の痛みや、社会や家の中の小さな痛みにも、目を閉じてしてしまうのではなく、「目を覚ましていたい」と願いたいと思います。そして、自分の中の「冷たさ」や「無関心」に気づいたら、それをイエスさまに正直に差し出してましよう。イエスさまに起こされているわたしたちが、今度は、眠っている仲間を、一番よいタイミングで、やさしく起こす人になれるように、心から祈りたいと思います。